松山城主上田氏の系譜と比企郡進出について

梅沢　太久夫

はじめに

武蔵松山城主上田氏については一九八五年発行の『東松山市史』で藤木久志先生の研究によって、それまで不透明であった上田氏の実像が明らかにされた。

上田氏の松山城在城については、これまで『鎌倉大草子』（『新編埼玉県史』資料編8―五六）に応永二十三年（一四一六）鎌倉六本松の合戦時に「上田上野介松山城主・疋田右京亮討死」と記されたことによりそれ以来、松山城の城主であった可能性が高いとされてきた。

筆者は、二〇〇六年二月に『武蔵松山城主上田氏―戦国動乱二五〇年の軌跡―』出版し、上田氏に関して、これまで進めてきた地方領主上田氏研究の一定の成果を公表した。

そこで、この研究を進め、検証して行く中で得られた資料を整理し、上田氏の武蔵比企郡進出の時期や、松山城主となった時期について再考したい。

一　上田氏研究の経過

松山城主上田氏については、『東松山史話』の中で吉見氏の出身と語られて以来、一九七一年に至るまでその研究の進展はなかった・利根川宇平は、一九七一年の『後北条氏研究』創刊号で、湯山学は一九七六年『関東戦国史の研究』で後北条領内の松山地方領主であった上田氏に初めて学問的なメスを入れた。

利根川が上田氏発給文書の検討を主に比企西部の在地武将の出身の可能性を指摘し、湯山は『小田原衆所領役帳』や『再草昌』の記録の分析を通じて、上田氏は、相模に本拠を置く武将で相模守護代にあった扇谷上杉氏の重臣の一人であったことを明らかにした。

そして、一九八六年の『東松山市史』で藤木久志は、上田氏に関わる史料を徹底的に調査収集し、その分析を通じて上田氏が

一、太田氏と並ぶ扇谷上杉氏の重臣で相模守護代にあった。

二、扇谷上杉氏の武蔵支配の先兵として比企に進出したこと。その年代は本土寺過去帳に応永二十年以降に没した松山在住の人物が記録されること等から、平一揆の乱によって高坂氏・竹沢氏が没落した間隙をぬって、十四世紀の終わり近くに進出した可能性が考えられる。

三、比企地方に在地性を扶植し、扇谷上杉氏滅亡後、後北条氏のもとで松山領の支城主の地歩を保った。

ことなどを明らかにし、上田氏研究の基礎を盤石なものにした。

筆者はこの藤木の研究に触発されて『武蔵松山城主上田氏―戦国動乱二五〇年の軌跡―』の中で上田氏関係史料の集成を図り、その年譜と事績を改めて整理した。そして、浄蓮寺に保存される『慶長八年過去帳』をデーターベース化し、五十八名を抽出。他の日蓮宗寺院の過去帳の記録と合わせ六十八名の上田氏一族の存在を明らかにし、その没年・法名・地域性などを整理して上田氏の系譜を作成した。そこでは永徳二年（一三八二）に上田氏が関東中世史上に出現してから、慶安二年（一六四九）

第1表　上田氏系譜（案）

		南北朝末期	杉禅秀の乱段階	享徳の大乱段階	実田城段階	権現山城段階	河越城段階	松山城攻防戦段階	松山城段階	江戸時代初期
		永徳2年	応永23年（1416）	康正元年（1455）	文明18年（1486）　永正元年（1504）	大永元年（1521）	天文15年（1546）	永禄4年（1561）	天正10年（1582）　天正18年（1590）	元和2年（1616）　寛永9年
相模国東郡	備前守系 行系				本）実田城にて没　（文）実田城討死 備前守朝直 行尊（1486）（存） 行本（1504） 備前守息 妙寿（1504） 存正	藤六 妙行（1521） 同息 妙定（1521） 行安（1520） 一存（1520） 行専（1522）	行宗（1546）		新三郎 （行）行蓮	
相模国東郡	河内守系 叡系		（本）鎌倉合戦討死 叡忠（1416） （妙）上野守 叡崇（1455） （本）鎌倉合戦討死 叡信（1416）	叡順（1455）	河内守 叡本（1496） 叡朝（1491）				天正18年松山城代 河内守 宗節（1594） （文）掃部助 （行）淨研 小田原城守 上野入道 （行）淨信 右京亮 淨覚（1588） 研理（文） （大見平） 又五郎 宗建（1589） 犬千世 （行）宗英 （永）	宗観
武蔵国比企郡	上野介系 宗系		（文）上野介・松山城主 貴道（1416） （文）鎌倉合戦討死 貴伝（1416）	小河在郷 上野介（1474生存） 某 （文）河越城将 上田入道某 （1477生存）	（文）実田城立て籠もり （右衛門尉） 宗伝（1496） （妙）上田内 秀幸（1496） （妙）次郎四郎 崇慶（1490）	（文）（妙） 上野守・上野入道正忠 宗詮（1520） （本）上田殿母儀 法詮 （本） 上田源二郎 衆 （妙）同息 円宗 （妙） 寿伝 （妙） 宗珍		（妙）案独斎・暗礫斎 又次郎政広・上野介 蓮好（1571） 感応院殿 （東）案独斎母 妙芳 蓮池院殿 妙題（1564） 長清院殿 蓮久（1561）	左近大夫 能登守・案独斎 宗調（1582） 光賢院殿 朝直 上田氏女 妙位 自芸斎 上野介・案独斎 日上（1597） （文）広元・朝広・憲定 隆統院殿 上野守簾中 妙上（1595） （文）慌珑院 妙俊兄 日能（1605） 王縄ノ御前 （妙）案独斎息女 妙俊（1594） 北条氏勝内	（行）安心斎後日円 案独 日円（1616） （東）安独斎 日忠（1633） （行）善次郎 昭証院殿 善次郎母 妙受 （行）後ノ善次郎母 自芸斎広元末子 金崎佐渡守政秋 成蓮（1594） （円） 某 某 某
武蔵国比企郡	蔵人能登守系 蓮系	蔵人親忠 希道 （文）1382生存）		蓮崇（1463）	中務丞 某（1488） （本）鷹野原討死 □	（文）権現山城立て籠もり 蔵人入道政盛（1510生存） 某 能登守 蓮忠（1518） 妙芳（板石塔銘） 妙忠（1522）	（左衛門尉政方） （文）（小沢原合戦） 蔵人（1530生） 某 蓮聖（1543） 上田内 蓮意（1546） （妙）長尾弾正女 下里袋方	小三郎 蓮順（1546） 河越夜戦討死 息 経寿（1544）	蔵人佐・能登守 妙賢院殿 蓮調（1583） 長則 蔵人佐・能登守（天正3年より） 妙賢院殿 蓮調（1583） 長則 （妙）能登守内室 妙栄（1573） （永） （行）前ノ善次郎 賢調（1590）	源左衛門母 妙調（1649）
その他			註記（妙）妙本寺回向帳　（1234）没年 （行）行伝寺過去帳 （東）東光寺過去帳 （本）本土寺大過去帳 （円）妙円寺過去帳 （文）文書・記録 無　浄蓮寺過去帳			両山9世・上田氏親類 日純（1550）		慈徳院殿 法仁（1572） 法清 （行）上田殿御母 （文）左近 某 小机衆	雖波田城主 周防守（仏像銘） 日道（1577） 大泉律師 （文）母は上田氏 日如（1626）	道証

に大河原浄蓮寺の檀家の一人としてひっそりと消えるまでの二六七年の流れを示す事が出来た。

扱った史料について優劣が存在する事は承知しているが、地域研究を進めるにあたって、史料の優劣を初めに選択するのではなく、可能な限りの史料を収集して、その整合性を見極めながら大胆に検討していくことにした。そうでなければ、閉塞感のみが先行し、上田氏の研究を含め、資料の少ない地域史研究では、これまでのように進展が望めないからである。

二　上田氏の系譜

第一表の上田氏系譜は、相模国東郡グループに備前守・行系上田氏と河内守叡系上田氏が存在し、一方では武蔵国比企郡グループに別れ、上野介宗系上田氏と蔵人・能登守蓮系上田氏が存在することを示した。しかし、細部にわたってこの系譜を見ると、連綿と連なるように見える各系統の上田氏も、初期段階から権現山城合戦段階までは、系譜の継続性は確保されていない事が知られる。特に、希道（貴道）は蔵人の後、上野介を名乗った可能性が高いが、鎌倉六本松合戦で討ち死にした後は、上野介の系譜はやはり六本松合戦で同時に討ち死にした叡忠の子であろう叡崇に受け継がれている。この叡系は日蓮宗第四世日叡聖人にゆかりの法名で、日叡の時、上田氏が日蓮宗の信者になると『門徒由来記抄』（『東松山市史』資料編2―八二三）に記録される。この叡系が上田氏の本流であったのであろう。叡系は実田城合戦段階では河内守を名乗り、上野介は比企郡小河在郷で河越城将の上田氏が名乗っているが、これは相模国東郡グループの叡系から分流したもので、法名は「叡崇」の庶流系を示すと見られる「蓮崇」へと流れたと理解している。上野介系は「希道と共に鎌倉六本松合戦で討ち死にした叡系上田氏の叡崇」を経て、「小河在郷・河越城将・実田城立て籠もりの宗系上田氏の某」に移ったのである。

そして、これらの相模を拠点としていたことが伺える上田氏の系譜の内、叡系は実田城合戦、宗系は権現山城合戦、備前守・行系は権現山城合戦から河越合戦段階でその系譜が途絶えている。

その後、武蔵国に進出していた上田氏のグループでは永正七年（一五一〇）に蔵人入道政盛が権現山城に立て籠もり、敗れて逐電する。この上田氏はこれまでの上野介系とは異なり、円覚寺大般若経施主として最初に記録される「沙弥希道俗名上田蔵人源親忠」と同じ官途を持つ蔵人系の上田氏であった。この系譜は以後、蔵人・能登守系として継続することを考えると、この人物は『浄蓮寺過去帳』等に記される能登守蓮忠に比定される。そして、享禄三年（一五三〇）には上田蔵人（『鎌倉九代後記』）・左衛門尉政方（『上杉年譜』に上田入道ガ祖父）が河越城将として記録される。この蔵人・能登守系は法名に「蓮」を、俗名は「政」を通字としている。そして、文明十年（一四七八）段階に河越城将であった上野介系上田氏も権現山城に在城しているが、その人は権現山城に日蓮宗の九世日純を迎えた上野入道正忠法名宗詮（日現曼荼羅裏書〔名古屋市本住寺蔵〕『東松山の歴史上巻』五〇四頁）であった。そして、この宗詮・円宗並びに備前守行系の上田名字中は永正十七年（一五二〇）に没した。

三　上田氏の比企進出の時期

上田氏出現の記録は『金沢文庫研究』第八巻第九号に報告された『大般若経刊記』が初出であり、この時は源姓上田氏を名乗り、名は親忠、

第２表　上野介系・蔵人系上田氏の主な事跡

永徳２年（1382）	円覚寺大般若経施主	上田蔵人源親忠法名希道
応永23年（1416）	（松山城主）	上田上野介法名貴道没
文明６年（1474）	小河在郷	上田上野介
文明９年（1477）	河越在城	上田上野介
明応５年（1499）	実田城合戦	上田右衛門尉没
文亀２年（1502）	相模守護代上田の館	
永正元年（1504）	実田要害落城・朝直討死	上田備前守（上野守）朝直法名行本没
永正７年（1510）	権現山城立て篭もり・逐電	上田蔵人入道
	神奈川の城（権現山城）在城	上田上野入道正忠
享禄３年（1530）	河越城将（小沢原合戦出陣）	上田蔵人
天文15年（1546）	河越夜戦→安戸に後退	上田暗礫斎
同年	松山城奪回・２の丸守備	上田又次郎政広（暗礫斎）
天文16年（1547）	後北条氏松山城攻略	上田暗礫斎
天文17年（1548）	本門寺三門施主	上田左近大夫朝直
天文19年頃	松山城主・慈光寺攻略	上田案独斎朝直法名宗調
同年12月晦日	浄蓮寺へ所領寄進	上田案独斎朝直
永禄３年（1560）	秩父大宮合戦・氏康松山在城	
永禄４年（1561）	太田資正松山城攻略上杉憲勝城主	
	北条氏康・武田信玄松山攻め	上田又次郎政広（暗礫斎）『上杉年譜』
永禄６年（1563）	松山城後北条氏攻略	上田案独斎朝直
永禄12年（1569）	北条氏松山は上田の本領と主張	
天正３年（1575）	長則印判状に朱印使用	上田長則法名蓮調
天正10年（1582）		上田朝直法名宗調没
天正11年		上田長則法名蓮調没
寛永10年（1633）		上田善次郎法名日忠没
慶安２年（1649）	267年の上田氏の記録終わる	上田源左衛門母妙調没

官途は蔵人、入道して希道を名乗っている。

次に『鎌倉大草紙』中に「上田上野介松山城主」と記され、管領上杉憲基側の武将として応永二十三年十二月二日に起こった上杉禅秀の乱に管領上杉家の重臣の一人として参戦していた。この人物は『浄蓮寺慶長八年過去帳』で法名貴道と記される人物と同一人と推定される。この史料により松山城主上田氏の出現とされてきたが、筆者の先の著作で指摘したとおり、「城松主山」という記録は後補であった可能性が高い。そのほか、集成できた百十九の上田氏関係史料を年代別に整理し、そこで上田氏がどのように位置づけられているかを記したものが第二表である。これによって理解されるとおり、上田氏の比企郡在住が見られるのは『太田道灌状』（『松平文庫所蔵文書』『新編埼玉県史』資料編５―一〇〇三）に記される文明六年（一四七四）である。一方、上田中務丞が長享二年（一四八八）十一月の高見原合戦に討死（『本土寺過去帳』）し、上田氏の一族が扇谷上杉勢の一員として小河近郊での合戦に参加していたことが知られるが、この人物の在地性は伺うことができない。

また、傍証史料となるが、東秩父村安戸の上田氏家宰山田氏の「山田屋敷跡」と伝承される地点の裏山に所在する山田氏一族の五輪塔群の紀年銘は、須賀谷原で両上杉氏が激戦を繰り広げた長享二年には、山田伊賀守系が在地していた事を伺わせる。長享二年四月十八日に妙仁禅尼の没を記し、山田氏過去帳（『寛政諸家重修譜』）に安戸城主と記される伊賀守直義法名道存の五輪塔は、大永四年（一五二四）三月二十二日に没した事を記している。少なくとも十五世紀後半には比企に進出していたと考えて差し支えあるまい。また、先に示した蔵人・能登守系上田氏の蓮忠も武蔵国比企グループの上田氏の本拠と目される大河原谷に「主君蓮忠・君母霊位」等と刻された蓮忠に関係する板石塔婆が二基建立され、

小河近在に蓮忠家臣の存在が想定されるなど、その蓋然性は高いと言える。

その時、上野介系上田氏は『太田道潅状』の「上田入道并同名図書助(太田資常)勢衆相添、河越城差置候、」によって知られるとおり、河越城の城将として存在した。この年代までの史料からは、上田氏が松山城主であった事は知られない。

四　松山城主への過程

上田氏は文明年間の初め頃比企に進出し、小河に住していた。

『関東管領記』（『東松山市史』資料編2―七八三）

「一、同(天文六年)　七月十八日、氏綱大軍ヲ率シ、川越ヲ出テ松山ノ城へ押寄ス、松山城主難波田父子城ヲ出テ合戦ス、先懸軍、難波田聊雖得勝利、後途ノ合戦、北条方悉ク打勝、難波田敗北」

『広沢家系別録』（内閣文庫）『坂戸市史』中世資料編Ⅰ八五五頁）

「元家子ヲ尾張(広沢)守忠信ト云、法名ヲ道正ト名ク、道正古傍輩難波田弾正少弼其法名ヲ善吟ト云、武州松山之城主タリ」

によれば、天文六年の河越合戦では松山城は難波田善銀父子が城主として守っていた事を伝える。上田氏が松山城に現われるのは天文十五年四月の河越夜戦の上杉勢敗北時点であり、松山城に敗走した上田氏は落城と共に安戸の砦に引きこもったという。これらは『関八州古戦録』（『東松山市史』資料編2―八〇九）の戦記で語られる松山城攻防戦の幕開けを伝える逸話であるが、松山城西方の大河原谷一帯が上田氏の本拠として『北条氏康・同氏政連署条書』で主張されている事を考えると、この「逸話」は事実であったと考えて差し支えないと思う。

上田氏松山城築城は『北条記』（『新編埼玉県史』資料編八―三八七頁）に「上田左衛門尉トリ立シヨリ、難波田弾正父子久ク住シテ」

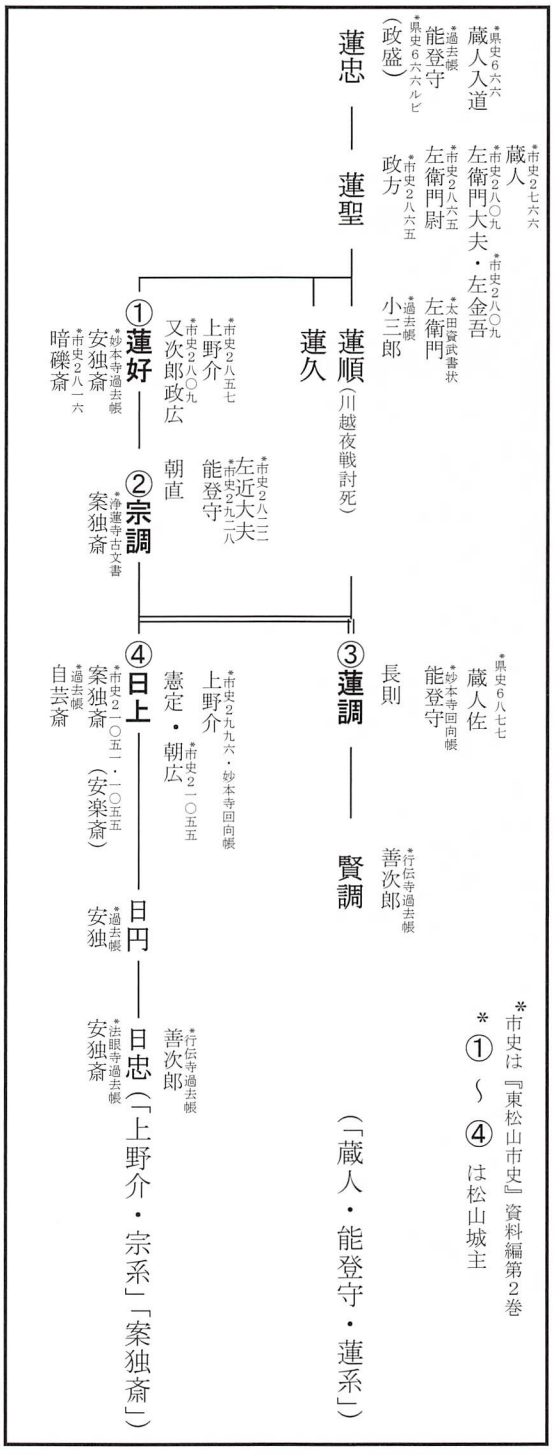
『上杉年譜八』（『東松山市史』資料編2―八六五）に「松山城ハ、上田入道カ祖父上田左衛門尉政方ト云者築立」と記録され、その根拠と推測される。上田入道（永禄五年の記録であり朝直）ガ祖父と『上杉年譜』に記される左衛門尉政方は系譜の検討によって河越城将であった上田蔵人法名蓮聖であったと推定されるので、おおよそ十六世紀初頭の時期であったのだろうか。上田氏が築城功者であったことは、『松陰私語第五』の「彼城者道真・道潅父子、上田・三戸・萩野谷、関東功者之面々、数年尽秘曲構」によって推測でき、このことは『歴史資料館研究紀要』第十一号で指摘した。しかし、松山城については、遺構の残り具合から上田氏築城の視点となる「小口前郭」が存在したであろうという指摘に止まらざるを得なかった。松山城の年代については吉見町の一連の発掘調査によって、十五世紀後半から十六世紀中頃の年代観が得られている。十五世紀後半は、比企地域でも長享の大乱を通じて築城が一般化する段階であり、上田氏比企進出期に該当する。左衛門尉政方とすれば、十六世紀前半となるだろう。いずれにしても、上田氏が比企郡に基盤を築き上げた段階である。仮に松山城が上田氏による築城としても天文十五年以前の資料に上田氏居城という記録が見られない事からして、『北条記』や『上杉年譜八』に記されるとおり、難波田父子が住していたと考えるべきなのだろう。ただ、難波田善銀が城主であったか、城代であったかについては判断する材料がない。

上田氏系譜を作成した中で理解された松山城主系は蔵人・能登守・蓮系上田氏が嫡流であったと見られ、その推移を一覧表に整理すると第三表のようになる。

第３表　上田上野介・蔵人・能登守系の「松山城主系」推移

	『太田道灌状』 上野介　某	上杉憲房書状 蔵人入道 上杉憲房書状解説 政盛	過去帳 能登守 蓮忠	上杉年譜 左衛門尉政方 鎌倉九代後記 蔵人	蓮聖	蓮久 長清院殿	蓮好 妙本寺過去帳 安独斎 感応院殿	関八州古戦録 又次郎政広 関八州古戦録 暗礫斎	比企氏系図 上野介政広 太田資武書状 闇礫斎	本門寺三門寄進状 左近大夫　朝直 浄蓮寺古文書 宗調 浄蓮寺古文書 案独斎　宗調 光賢院殿	清正公神社板碑 能登守 小田原衆所領役帳 案独斎	正法寺文書　妙本寺過去帳 蔵人佐　能登守　長則 蓮調 妙賢院殿	源栄院寄進状 上野介憲定 正法寺縁由・天正日記 安楽斎朝広　日上 小田原一手役之書立　過去帳 （案独斎）　自芸斎 隆珙院殿
文明　６年 1474年	小河在郷												
文明　９年 1477年	河越城在城 苦林合戦												
永正　７年 1510年		権現山城 （立て籠もり）											
永正１５年 1518年			12/26没				1520年上田上野守宗詮一族没						
享禄　３年 1530年				小沢原合戦 （河越城将）									
天文　２年												長則出生	
天文　６年 1537年				河越合戦・難波田弾正松山城へ敗退 松山城主難波田弾正正直（善銀）									
天文１０年 1541年				河越合戦									
天文１２年 1543年					12/8 没							長則10才	
天文１５年 1546年						４月20日　河越夜戦・後北条氏松山城攻略 ８月28日上杉氏松山城奪回。闇礫斎城代　城代 10月５日　又二郎碓氷峠合戦に出陣							
天文１６年						12月13日闇礫斎・後北条氏に与力又次郎政広城主							
天文１７年 1548年										左近大夫朝直　城主 本門寺三門寄進			
天文１９年 1550年										案独斎宗調朝直 浄蓮寺へ山王免３貫文寄進			
永禄元年 1558年										「役帳」に案独斎			
永禄　３年 1560年						３月太田資正松山城攻略 10月北条氏康松山城在城							
永禄　４年 1561年						5/22没	９月太田資正松山城攻略 （申歳（永禄4年）一乱の砌者、父子共に小田原在城）						
永禄　６年 1563年							北条氏康、松山城を又次郎に元の如く守らせる。 安礫斎初め又次郎という。						
永禄１２年 1569年							４月（氏康書状に）「申歳一乱の砌者、父子共に小田原在城」						
元亀　２年 1571年							8/1　没			2/20 清正公神社に板碑造立 能登守朝直			
天正　元年 1572年												城主 （朱印使用カ）	
天正　３年 1575年										朱印使用		朱印使用	
天正　４年 1576年												蔵人佐	
天正　６年 1578年													
天正　９年 1581年												能登守	
天正１０年 1582年										10/3　没			
天正１１年 1583年												3/5没　50才	城主
天正１５年 1587年										亡父・慈父			上野介憲定
天正１８年 1590年													４月松山城落城

第四表　松山城主系上田氏の流れ　（比定された人物の位置や官途等については資料からの推定を含む。）



＊市史は『東松山市史』資料編第2巻
＊①～④は松山城主

天文十五年の川越夜戦以後、上田氏の松山城在城が記録されるが、この時点では、上田又次郎政広闇礫斎は二の郭防備の城将であった。

『太田資武書状』（〔斎田茂先所蔵文書〕『東松山市史』資料編2―八一六）

「一、（中略）然間、松山ノ城へも芳賀伊与守ニ随一之者共余多指添、被籠置候之処ニ、同年八月廿八日之夜、親ニ候者忍入、彼城を乗取、右楯籠者共を、或者討取、或者追落、終ニハ遂本望、在々所々掟等平均ニ申付、二度松山ニ令在城候処ニ、三楽斎兄ニ候信濃守、於岩付ニ病死、実子依無之、彼地江親ニ候者打入候砌、扇谷官領之舎弟七沢七郎、奥州辺ニ流牢候を尋出引取、彼七郎を取立、岩付ヨリよき者弐百騎付、松山之城主ニ仕候処、（中略）其節、松山ノ城ニ上田闇礫斎を為留守居頼置候処ニ、無其甲斐、松山之城を氏康へ相渡候、以其忠節、上田一跡ヲ過半闇礫斎ニ給由候」

この、記録等で知られるように、上田氏は川越夜戦で奪取された松山城を奪回した後、後北条氏に与力し、松山城主の地位を確保した事が伺える。その年代は『年代記配合抄』（〔内閣文庫〕『坂戸市史』中世資料編Ⅰ―二〇九四）によれば天文十六年の末であった。この時の上田闇礫斎（案独斎）は又次郎政広、或いは朝直と混用されているが、妙本寺回向帳（『太田区史』資料編社寺1）に安独斎蓮好と記される人物が闇礫斎政広であったと考えている。朝直の出現は天文十七年のことであり、官途は左近大夫、蓮好は『比企氏系図』に上野介を名乗り、武蔵国進出の嫡流系である法名「蓮」を継承している事からも推定できる。そして、『太田資武状』の記録との整合性が確認される。

『太田資武書状』（川越市一九七五『川越市史』史料編中世Ⅱ六七二頁）に「上田闇礫斎之筋者、檜皮山之上田トテ庶子にて候、惣領をハ上田左衛門ト申、武州松山之近所石山ト申候之城主にて候へとも、此の筋絶テ久罷成候故、不存者者、闇礫斎を惣領之様可申成候（後略）」

松山城主は蓮系の庶流であった政広を初代とし、二代朝直・三代長則・四代憲定と継続したことを示した。その流れは第四表となる。

『太田資武書状』に「松山之城を氏康へ相渡候、以其忠節、上田一跡ヲ過半闇礫斎ニ給由候」とも記される。復元した系譜にも実田城合戦・権現山城合戦を契機に一時断絶した相模東郡グループの上野介系・河内守系・備前守系を名乗る人物の法名が存在し、松山城主上田上野介系のもとでそれぞれが回復された事が伺える。

【参考・引用文献】

梅沢太久夫　一九八九「比企西部の三城について―特に小口に見られる共通性」『研究紀要』第十一号埼玉県立歴史資料館

二〇〇六『武蔵松山城主上田氏―戦国動乱二五〇年の軌跡』さきたま出版会

埼玉県　一九八〇a『新編埼玉県史』資料編六　中世二　古文書二

一九八〇b『新編埼玉県史』資料編八　中世四　記録二

一九八〇c「小田原衆所領役帳」『新編埼玉県史』資料編八付録

一九八二『新編埼玉県史』資料編五　中世一　古文書一

一九八八『新編埼玉県史』通史編二　中世

利根川宇平　一九七一「武州松山城主・上田氏について」『年報後北条氏研究』創刊号　後北条氏研究会

東松山市　一九八二『東松山市史』資料編第2巻

比企の城シンポジューム実行委員会二〇〇五『検証・比企の城』

藤木久志　一九八〇「松山城主案独斎のこと」『新編埼玉県史だより』（資料編6）

一九八五a「第五章第二節」『東松山市の歴史』上

一九八五b「第六章第二節扇谷の重臣上田一族」『東松山市の歴史』

湯山学　一九七六「扇谷上杉氏の被官上田氏―豹徳軒と案独斉―」『関東戦国史の研究』名著出版

太田賢一　二〇〇六『松山城跡発掘調査報告書』吉見町教育委員会